

●高澤良一 第十句集 素抱

●十月―十二月

穂芒の末路思はず風吹けり
広がれる鯿の水輪のゆき着く岸
つぶらなるなんきんはぜの実好日や
無聊とて秋はかまけるもの多し
困の央に押し出しのよき女郎蜘蛛
初鴟の喋々来意告げてをり
心臓のお薬六粒露けしや
鴟のくる一劃青空見えてをり
死人花薬は変じてむらさきに
仙厓の拙き月のなぐり描き
見当のつくこゑ過ぎぬ秋簾
秋冷のさし込む膝を二タさすり
前後しててんてこ舞のしじみ蝶
しじみ蝶捕らむとすれば擦り抜けて
秋日受く額うっすら膩じみ
黒揚羽手離す一茎揺れてをり
車前草の穂の擦り切れし岬みち
木瓜の実の一つとてつもなく大き
揚げコロツケ油噴きある秋日和
あやす嬰は地蔵の重さ秋の暮
小心の秋の雀も餌貰ひに
雀あぐ秋の小さな土埃
月光に色を奪られてまんじゅさげ
手にとりて豊平の初氷
旅立ちや朝寒の息弾ませて
手始めに山の頂もみずれり
布袋高山宵祭からくり神髓見する秋の空
布袋台金冷まじき機関樋

天高くからくり繰れる布袋台
布袋台覗けばからくりあやつり衆
秋空を金欄屋台押し移る
下三之町の宵闇屋台来る
宵祭屋台の端はなは神楽台
高山の宵闇屋台の目白押し
星空ゆく屋台提灯夢うつつ
五百提灯屋台の後後から
屋台曳かるさん法被姿かな
星空に聳えわけても鳳凰台
高山に思ひ知らさる月夜寒
高山の月を歩ませ練り屋台
御所車屋台曳き廻し金具さやかに大八台
栗材の台輪屋台秋日差す
宮司さま馬でぱかぱか御神幸ごじんこう
秋空へ打ってこどもの鬪鶏樂
御神幸一文字笠キツと締め
御神幸*しようごいは榊替わりの樹木 冬青(そよご)の訛りかしようごい隆と押し立てて
山城山公園寄りに町は造られ朴もみぢ
花すすき照蓮寺仏拜んでゆかれよと
色鳥の目も覚めやらぬ御神域
自然薯黄葉城山の径明るうす
高山の護国神社の栗小粒
棗東山寺町の実想ひにいろいろあるやうに
素玄寺の芒丈なす荒法師
水澄める宗猷寺町たもとほり
色鳥は山から来たり宗猷寺
秋洞雲院うらら山辺の寺の一位垣
遠来を寺の紫苑にねぎらわれ
辻々に秋の日を浴み秋葉さま

江名子川水音棗に響かせて
水の秋石樋渡す江名子川
川べりに棗ここたく鉄砲町
朝市の地べたを覚ます鷹の爪
朝市の味見くさぐさ赤蕪かぶら
一人泊つ長夜に飛弾の味噌せんべい
棗の木青実ここたく製麵所
旅先の飛弾に酌めるや薦豆腐
飛弾人に棗の砂糖煮手ほどき受く
力草飛弾国府・清峯寺円空佛見清峯寺に寄らむ
鶴巢村刈田越しなる円空堂
坂がかり円空堂へ嫁菜みち
円空堂鉄錠外す音露けし
うそ寒の頬つりあがる円空佛
観音の千手は剣冷まじや
空稲架はあたかも牛の四つん這ひ
スクーターとばす農道刈田晴れ
山門にスズメバチの巢林昌寺
冷まじや地獄絵仕置の白女體
赤錆飛弾古川の棗も交じる川辺の木
鯉一転秋水を遡るあり
和ろうそく作り冷まじ親爺の手
一人酌む酒は蓬萊宿夜長
秋簾五枚連ねて真宗寺
古川の町貫きて川澄めり
段きたのぼる気多若宮の秋の蝶
古川の秋の蜂ゐる総鎮守
上気多の段々畑の稲の株
徒組は割喰う旅や蜂を除け
祭待つ茶房狐火祭にキツネメイクの男

行列の狐のあねさんかぶりかな
みやうみやうと霧の乗鞍スカイライン
亜高山帯のもみぢの色はと見て
乗鞍の霧を糧としさるをがせ
乗鞍の紅葉如何と登りつめ
乗鞍乗鞍高原のことし色悪しななかまど
乗鞍の黄葉にスリッパして下山
落葉の中踏み当つ走り根の撓み
栃黄葉打つ雨音に包まれし
阿弥陀光桂黄葉の押し照るは
乗鞍の雨来て黄葉素っ飛び
日雀啼き大日岳の霧霽らす
水飲むをルリボシヤンマとしておかう
木道に人に蜻蛉の寄り易し
乗鞍の巖も黄落せんとせり
乗鞍の霧にトウヒのかくれんぼ
秋麗ら眼にせる白樺一本目
ひとりでに唄が出てくる花すすき
乗鞍の秋磧より林道より
白樺のほつりをながれ水澄めり
水榭の実の落つなかに休憩す
大磐が目隠し露天湯ヤチダモ散る
赤もみぢせせらぎの湯黄もみぢとことん愉しめり
榭の木沢もとより水榭黄葉して
湯元の辺穂の真っ黒な猫じやし
黄葉どき髪膚完爾と硫黄泉
乗鞍の黄葉風と云ふに遭ふ
草洪の上高地乗鞍林道にほひ抜けずよ夜寒の湯
黄落の上高地泡の湯で乗る五人組
上高地ビクターセンター木々の秋

山化粧ふケシヨウヤナギも化粧して
大正初期植ゑしカラマツ黄落期
サワグルミ端正な葉のもみずれり
先づ洒落た葉なりハルニレ黄葉とよ
霧好きは一位に如かず摩利支天岳
肝木カンボクの熟れ実は鳥に美味からず
上高地帝国ホテル樅の秋
黄落の雨の跳ね見ゆ木道に
大正池雨にもめげず浮塵子飛ぶ
秋の雨大正池の砂礫打つ
シナノザサ秋水音もなく流る
鴛鴦がゐて増水の梓川
木道の終端黄落振返る
梓川ヤナギもみぢの散り込む瀬
清流は曲つてみえなくなり秋風
安房峠平湯温泉 神の湯まだら模様化粧う山
濃尾バス尻を振り振りもみぢ山
鮎葉山行並でありし覗かせ貰ふ魚籠
根釣して葉山の鳶に啼かれける
石踏綻ぶその数好日とや云はん
褒貶は成り行き任せ石踏の花
穂芒に声在りとせば御空より
御用邸巡查眺むる秋の海
公園日比谷公園 ガーディング ショウウの秋トピアリーコンテスト
サフラン買ふ客筋それとなく見をり
サフランの一球おまけこゑ弾む
秋空にジラフ仕立てのトピアリー
フィアンセに菊束捧ぐトピアリー
トピアリー秋のイルカのジャンピング
秋楡のもみづる日比谷公会堂

かうなつて仕舞へばさざんか散る他ない
医師の云ふ風邪軽んぜず山茶花どき
一団の黒の礼服石路日和
高々とさざんか垣の壁なせり
序幕から蜻蛉が飛んで村芝居
生きあせり無くもがなとも氷頭膾
紫蘇漬の紫蘇の粒嚙む一人酒
秋雷のさあらぬ体ていに鳴り出せる
秋雷の果てはざとくる雨の快
秋の雷どすんと荷物おろすごと
なほ容とどむ朽木に蝸牛
秋草を食卓に活け愛づ生活たつき
肌寒や雨の青どんぐりを見て
擦過音身ほとりに殖え秋半ば
雨の鴟隣へ移る諍ひごゑ
秋晴れのヒバを降りくる猫の爪
自転車の遠乗りをして鯊の海
秋風に釣れてひらひら海たなご
草叢にラジオ響かせ根釣人
根釣人脳梗塞のことをぼつり
突堤にリハビリ兼ねて根釣人
突堤に半日ねばる根釣人
根釣人帰り支度の函一つ
新松子掠めて飛べるへりコプター
柏槇の茂み宿りの雨の鴟
中継ぎに吾が家の一樹雨の鴟
様子見の開き加減や雨の菊
その生活たつき手に取るやうに萩便り
こんなこと似合はざれども懐手
風の日は湯が愉しくて冬隣

菊花展日和と家を後にせり
木犀や同窓会に出向く道
木犀も記憶も薄るるばかりにて
所在無き雨日を汝も女郎蜘蛛
敗荷大船植物園にたぶらかされてゐるごとし
敗荷に風のつれなくなりにつけり
敗荷の顔向けならぬ体ていに悄気
青蓮の器量の程も斯くなりて
敗荷の無頼たること尚止めず
敗荷の全うせるものここに見き
腹蔵なき敗荷となり天が下
水破る音のみしりと蓮の奥
盆栽菊調度の鉢も凝りに凝る
芒生ふ駅前仮バスターミナル
棗の辺雨湿りして裏木戸あり
傾ける銀河系模し懸崖菊
懸崖菊花に遅速の多々あるを
日時計は落葉に埋もれ時刻む
サルビアにおもふダンテの煉獄編
図書館へ雨のユリの木落葉踏み
泊船の一つ緑に冬灯
物申す鴉は単刀直入に
見通せるほどに庭透け冬珊瑚
安穩に馴らされゆく身石路の花
蜜柑まだ酸きものと手を控えをり
寄せ植えの多肉植物冬に入る
冬日和忘れぬ裡に用を足す
週末のユリの木黄葉散り空きて
剪り惜しむ冬菊にして丈長し
聖樹の種証あかせば発光ダイオード

送金を了へたる安堵石路の前
サフランの花の馬鹿馬鹿しさに惚れ
冬菊に佇てばすぐ来る夕べかな
試飲の顔大きくゆがめ木天蓼酒
冬菊をいとほしむ眼を誰もせり
下積みのあくせく知らぬ都鳥
喜んでピザ生地を伸す^の十二月
シーサイド・マリナー聖樹の辺のデイト
うろ覚えの聖歌ミッションスクール出
暮れてなほ母艦遊びや青木の実
段取りをさらってをりぬ冬日向
金柑の笑顔そこらに振りまきて
古俳諧ほどの目出度さ万年青の実
潮水に海鼠生かして風鳴る日
晩酌に海鼠おだぶつする夕べ
海鼠に髯あらば弁士にうってつけ
海鼠に小便そんな愚行もしてみたく
頭搔く海鼠なんぞも見てみたく
海鼠食ふときは鳩尾暗くして
指さしてこれが海鼠の中の首領^{ドン}
海鼠噛む顔を四角に三角に
海鼠噛む歯がまだありて好々爺
海鼠酔に漬ける殺生いたしけり
硬直の酔のもの海鼠勘弁な
酔海鼠に錆つく顎を使ひけり
これやこの身につまさるゝ海鼠の腸
酔海鼠に顎の運動いちにつきさん
このところ海鼠倣うて黙しをり
大海鼠無理難題のごと置かれ
裏返し海鼠の何だこの突起

海鼠の脚あらかた疣に退化して
籠る間も時移りをりはずみだま
チンゲン菜油を飛ばす十二月
振り込みの控隠しに十二月
巨人^{物故俳人}逝く年そここに大き穴
数え日の朝の日に舞ふ綿ぼこり
臘梅の花くたくたになつてをり
年寄りには平屋を好む枯十賊
昃れば肅然として冬けやき
焼鳥の串まで焦げて酔迅し
吾がかぶり振る人参を妻買へり
手狭なる机の上の冬日差
同床異夢冬の花火を俱に見て
きなくさき戦が間近焼^{シシカバ}鳥
世間体一つ外せば冬青空